

2006
2.14
火曜日

南日本新聞

夕刊

瀬尾 昭一郎 健康コラム 思うこと

第4回

病は「気」から

「気」という文字を使った単語は多い。勇気、元気、意気、殺気、湿気、気分、等々。では、気とは何か。

血液や水分のよどみによる変調をそれぞれ「瘀血（おけつ）」「水毒」と言うことは既に書いた。これらを動かすエネルギーを漢方では気と呼ぶのだ。血液や水分は目で見えるが、気は見ることができない。

人はいざというとき、体の六十兆個の細胞にスイッチが入り、常識では考えられない力を出すことがある。

俗に言う「火事場のばか力」というあれである。これは気が起こす不思議が、形として現れた一瞬であろう。

昔から「病は気から」と言われる。ストレスの多い社会の中で気の問題はますます大切になってくる。男の人がなんでもないのに、のどが詰まった感じがして、検査をしたがどこも悪くないと言う。ストレスである。これは気うつ（うつ）の病状で「梅核気（ばいかくき）」と言う。梅の種でどがふさがった感じがする病だ。また、看病疲れで体がだるくてしかたがない人は、気がしぼんで気力が出不い病状だ。

別の例。女の人が顔がのぼせて赤みがとれない。その上人目を気にするとますます

赤くなってしまうと言う。血が頭に上った症状だ。これは気が上っているの、下げてやる必要がある。最後に一例。小学生の男の子が母親と二人で来た。男の子は目をシパシパさせて落ち着かない。一種のチック症状だ。気のよどみである。親に何か訴えたいが、言いだせない感じに取れた。同様にオネショも気のよどみである。

気は目に見えないが、心と体を結ぶ大事な働きをする。自然の中から生まれた漢方薬は、この気の流れをうまく調節するのにすぐれている。自然の力の知恵である。

